

藤村とクロボトキン『相互扶助論』

—小説「壁」・『家』を中心にして—

瓜 生 清
(国 語 科)

はじめに

近代作家とクロボトキンの関係については、つとに有島武郎や石川啄木などの研究において論議されているところである。藤村の場合、クロボトキンの無政府的共産主義のヴィジョンに共鳴し、進んで社会変革の理論的摂取に向かおうとした訳ではないが、「家」の問題という独自の視点から明治四十年代クロボトキンへの関心を主体的に深めた作家の一人に挙げられなければならない。以下の試論は、資料的な制約もあって不十分なものであるが、「家」に結びつけられた人間関係の直中に身を置いて扶助への具体的な関与を強いられた藤村が、クロボトキンと接触することにより、小説「壁」(「早稲田文学」明41・10)から『家』(「緑蔭叢書」第三篇 明44・11・3)にかけて、どのような独自の考察にまで進み出ようとしていたかを瞥見するものである。

(一)

藤村がクロボトキンとその著作に言及した資料はさほど多くない。つぎに資料名を发表順に列挙し紹介する。①「種の為、女」(「早稲田文学」明41・3)は、書名については明らかではないが、クロボトキンの著書を読み、その論旨への共感を具体的に述べた最も注目すべき談話。②「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」(「秀才文壇」明42・5)は、クロボトキンとトルストイを自由に考える近代人の祖ルソーを源流として生まれてきたと位置づけている。③「クロボトキンの自伝」(「太陽」明42・7)は、『ある革命家の手記』(一八九九年)に言及したものの。④「清少納言の『枕の草紙』」(「文章世界」明43・11)⑤「音楽会の夜、其他(三)」(「東京朝日新聞」大3・4・30)⑥「北村透谷二十七回忌に」(「大観」大10・7)⑦「思想と人物」(「春を待ちつゝ」所収、大14・3・8 アルス)は、人物との関係を引き離して思想を取捨選択する安

易な態度を批判し、クロボトキンの高貴な人間性と利他的理想主義とは一体不可分の関係にあることを強調しようとした論。⑧「ドストイェフスキイのこと」(『新小説』大14・4)。管見に入った限りで特徴的なことと言えば、上記の①から⑧までの八つの資料のうち、半分に当たる④・⑤・⑥・⑧の四点が、ロシア文学を展望する手引書として藤村を含め同時代の文学者に広く活用された『ロシア文学の理想と現実』(一九〇五年)をめぐって言及されていることである。その他、先行研究がクロボトキンと関連づけている小説に「分配」(『中央公論』昭2・8)が挙げられる。作中、いわゆる円本の印税によって思いがけぬ多額の収入を得た「私」が、折からの不況のため多くの人々が失業と貧困に苦しむ不安な世情を意識しながら、「『財は盗みである』といふあの古い言葉」を想起し自問自答する件がある。福田清人氏等は、具体的な出典名について明示していないが、いずれもクロボトキンの言葉であると述べている。しかし、これは誤りで、出典は私有財産を窃盗であると断定したブルードンの「財産とは何か」(一八四〇年)であろう。なお、筑摩書房版『藤村全集』別巻(昭46・5・30)の「蔵書目録」によると、クロボトキンの著書として「Mutual Aid」が架蔵されている。これは、一九一九年(大8)刊のもので、小説「壁」・「家」より後に再度入手されたものである。

以上のように、クロボトキンに関連する諸資料には、『相互扶助論』(一九〇二年)の書名を挙げたものは見出せない。しかし、『相互扶助論』の書名こそ挙げられていないが、①の資料「種の為、女」は、小説「壁」とその自注である『壁』に就て(『国民新聞』明41・10・29)及び小説「家」と相互に関連づけることによって、藤村が『相互扶助論』といつて出合い、そこからどの様な考えを引きだされていたかを考察で

きる興味深い文献となっている。

さて、藤村とクロボトキンの具体的な接触はいつ頃まで遡れるのか。前記「クロボトキンの自伝」によると、国木田独歩の在世中、自然主義文学の作家が多く集まったサロン「龍土会」の席上で、中沢臨川から『ある革命家の手記』を「小説以上の大著述だと思ふから、是非読めと言はれた」と回想している。その時期は明らかではない。藤村と親交を結んでいた小山内薫が中心となって創刊された同人誌「新思潮」の第二号(明40・11)に、『ある革命家の手記』をその巻頭にあるブランデスの序文に拠りながら詳しく紹介した「富士山麓より」という一文が発表されている。筆者は猪頭生の仮名である。猪頭生の雅号が誰なのかははっきりしないが、「新思潮」第三号(明40・12)の彙報欄「師友より」に発表された寄稿家栗原元吉の書簡に「富士山麓よりの一文も同氏(稿者注 中沢臨川)の筆かと存じ候」とあるので、「富士山麓より」の筆者は中沢臨川であろう。そうすると、藤村が読むことを強く勧められたのは、臨川に読後の感動の余韻が強く残っていた頃、すなわち「富士山麓より」の執筆時期に関して本文中に「今日は旧暦七月七日」とあるので、これからさほど離れた時期ではなかったであろう。遅くとも肺患の重くなった独歩が、翌四十一年二月四日神奈川県茅ヶ崎の南湖院に入院する前の時間であったことになる。

ちょうど同じ時期に、藤村がクロボトキンに言及した前記「種の為、女」が発表されている。「種の為、女」は談話筆記である。当然その資料的価値について疑義を抱く向きもあろう。しかし、慎重な言動で定評のある藤村は、談話筆記が発言の真意を正確に伝えない場合、無用の誤解を避けようとして「寒き口唇(予の「文学談」に就いて)」「読売新聞」明39・10・27)「新思潮」の記者に(『新思潮』明45・3)等の訂

正文を度々発表している。「種の為、女」については、同様の経緯がないので内容に即して考えることは許されるであろう。この談話は、藤村他四名の作家の聞き書きを集めた総題「諸作家雑談」の中に収められている。冒頭に書かれている前書きを見ると、所収された諸作家の談話は、四五年前からごく最近のものまで取材時期はまちまちであることとわられている。しかし、談話中に自作「水彩画家」(「新小説」明37・1)とモチーフが共通する田山花袋の「蒲団」(「新小説」明40・9)の表現方法の新しいさに言及した件があるので、雑誌記者の取材が九月以降に行われたことははっきりしている。

「早稲田文学」明治四十年十一月号の「記者日記」には、この取材時期の特定に関連する明治四十年十月十四日付けの藤村のハガキが紹介されている。記者の再三の訪問を無にした不在を詫び、在宅日を指定して来訪を乞うたハガキである。その内容は、『春』(緑蔭叢書)第二篇明41・10・18)の執筆に専念するために、京橋区新佃島の海水館に籠もり日曜毎に帰宅するような近況を報告した神津猛宛書簡(明40・9・21付)と合致する。十月十四日は月曜日である。来る二十日の日曜が所用で差し支えるため、二十七日の日曜日を指定していることになる。「早稲田文学」記者が藤村宅を訪れたのは、十月二十七日の日曜日であったと思われる。なお、「種の為、女」の中で過渡期に生きる「前駆者の奮闘は悲惨なものでせう」と述べている「前駆者」の語句は、メレジュコフスキーの三部作小説の第二作『前駆者』(一九〇〇年)の題名と関連する。小説『前駆者』に言及するエッセイ「小説の題のつけ方」が掲載された『文章世界』の発行日が明治四十年十一月十五日であることも、「記者日記」によって推定した訪問時期の傍証となろう。

(二)

藤村は「種の為、女」で次のように語っている。

①この間少し調べる必要があつて、一寸あのロシアのピーター・クロボトキンの著書を読んで見ました。ひとりだくと云ふのが所謂近代個人主義の思潮でせうけれどあの人——無論御承知の社会主義者ですが、あの人の見方なども面白いと思ひますよ。その見方と云ふと、人類全体と云ふ所に目をつけて居るのです。さうです高所から見下すやうな態度が見える。何とかやかましい事を云つて我利我々と騒いで居ましてもいゝ具合に治まつて行くのですよ、世の中の姿と云へばまあそこでせう。離れくのやうで実は継がつて居る、要するに人間生存の意義は「種の為め」と云ふ風なのがクロボトキンの論旨でした。(傍線瓜生、以下同様)

以下傍線部の順序に従つて、①読んだ時期、②調べる必要性とは具体的になんであったのか、③クロボトキンの著書とは何をさしているのか、④藤村が読み取ったクロボトキンの論旨の理解の仕方について考察していく。まず「この間」という読んだ時期を正確に特定するのは困難だが、前記の「記者日記」の内容等から明治四十年十月二十七日からさほど遠くない時期と考えられる。次に、クロボトキンの著書を読むことを促した「調べる必要」が何であったのかは明確にしがたい。あえて推測すると、明治四十年七月二十六日付の神津猛宛書簡で、『破戒』(緑蔭叢書)第一篇 明39・3・25)の出版は「恩借に酬ひて余りあるべきにも関らず」、所期の約束が果たせなくなった理由について、「小生が身辺を圍繞せし親戚の情実」を挙げて詫びている文面が関係するのではなからうか。北小路健氏は、『図説「夜明け前」の栞』に明治四十年五月二日付の宮

下席三に宛てた長兄島崎秀雄の書簡を翻刻紹介されている。これに拠ると、何らかの不正事件に連座して八月末日まで検束中の身であった秀雄は、旅費の調達が出来次第台湾に渡航する予定と伝え、東京の留守宅の窮状を救って呉れるよう送金の依頼をしている。上記神津宛書簡の日付と秀雄の検束が八月中まで解けなかった時期とがほぼ一致しているので、「小生が身边を囲繞せし親戚の情実」の文言は、秀雄の渡台と連動して留守宅の家族への経済的な負担の問題が持ち上がったことを指すと考えられる。秀雄は家督相続後、事志と違って家運を傾けてしまった焦燥感から、名家の頹勢を挽回しようとして次々と投機的な事業に着手しては失敗し、一族に累を及ぼした没落旧家の家長の典型的な人物である。渡台は、長年の不始末を糾弾され、責任を取らされた行動であった。その結果、残された長兄の家族は、次兄島崎広助と藤村の援助の下で生計を維持するほか手段がない状態に陥っていったのである。長兄秀雄が引責し渡台せざるを得ないような状況の中で、藤村は扶助に纏わる同族の人間関係を根本から問い直す「必要」を痛感して、クロボトキンの『相互扶助論』を読んだのであろうと思われる。

上記のような直接的な「必要」性と強く関連するとは言いがたいが、『相互扶助論』が人間を含めた生物界の法則は適者生存であると強弁する進化論者や、所謂社会ダーウィニズム的な考え方を強く批判していることも看過出来ない。スペンサーの社会進化論が日本に流入し一世を風靡するのは、明治十年代以降、主として明治年間にかけてのことである。これ以後「弱肉強食」の言葉が、進化論という科学思想に裏付けられた自明の法則として巷間に一般化していったのである。その意味において、失意の人となって渡台した秀雄は、優勝劣敗を原理として再編成される明治の競争社会における敗者とも言える。秀雄が渡台した明治四十年と

言えば、藤村が同人雑誌「文学界」(明26・1・31・1)に結集した青春群像を描く第二の長編小説『春』の構想に腐心していた時期である。『春』に描こうとした「文学界」時代は、社会進化論が最も席巻した時期とも重なっている。藤村が社会進化的な時代風潮を批判的に考えていたことは、『春』の第九十二章に、北村透谷の明治二十年八月十八日付け石坂ミナ宛書簡の草稿を引用していることでも明らかである。その書簡中には、明治十七年のことを回顧して、万民の為に政治上に尽力する「一個の大哲學家となりて、欧州に流行する優勝劣敗の学派を破碎すべしと考へたり」とある。この書簡は再度「北村透谷の短き一生」(『文章世界』大元・10)でも取り上げられているが、『春』に行われた引用が、畏敬する先駆者透谷の先見性を物語る思想の一端として肯定的に紹介されようとしていることは疑いない。

名門の末裔である自恃意識と無縁であった筈もない藤村側から見ても、昔日の面影のないまで衰退した旧家の悲哀をなめつくしただけに、名家の敗北を必然とする優勝劣敗の論理に同調することはできなかったであろう。社会ダーウィニズムの非情な論理の横行を批判し、没落旧家が犠牲者をださなければならなかった弱点を抉りだしながら、それを克服する別個の人間関係の確立を必要としたはずである。それは、先走った言い方をする、近代個人主義を徹底するラジカリズムによって「家」を切捨てようとはせず、自尊を確保しながら同族への係わり方を模索することを通して、個人主義の正と負を根底から問い直そうとした藤村の粘り強い闘い方を考えることに自ずとつながっていくはずである。

論述が前後したが、先に引用した談話「種の為、女」の内容に立ち帰って考えてみたい。この談話で注目すべき点は、イブセンが引き合いに出された冒頭から、個人主義の枠組みで考える記者と、人間が自己の意識

に固執すればするほど個として孤立を深めていかざるを得ない背理に対して、クロボトキンの考え方を対置して個人主義の特権的な価値付けを排する見方を「面白い」と肯定的に評価する藤村との間で、立場の食い違いがあらわになっていることであろう。藤村は、個人としての「人間生存の意義」は「種の為」に相互に連帯しあう「人類全体」への繋がりによって尽くされるという見方に新鮮な驚きを感じていると考えられる。踏み込んで言いかえると、人間が相互に「我利」を譲らず、自分だけの利益を主張して互いに相剋しあうエゴイズム等の「近代個人主義」の負の問題を相対化することが出来る主張に接した衝撃が語られていると考えられるのである。談話の冒頭で、個人主義を突き詰めてゆくと国を追われたイプセンに典型を見なければならぬと語る記者の見解をたしなめたり、人間の生存意義は種の為であるというクロボトキンの主張に、再度「近代個人主義」の立場から記者が不同調の考えを洩らしたのに対して、藤村が依然として「つまりはそんな所でせう」と見解を固持し改めようとしなない談話の流れは、クロボトキンの考え方について藤村の肯定的な価値判断が終始一貫していることを物語る。前記談話によると、藤村が読んだ「クロボトキンの著書」が何であったのかは不明である。しかし、以上のような「クロボトキンの論旨」に関連する著述といえ、彼の無政府の共産主義の理論的基盤をなし、人間進化の根本要因に相互扶助の本能の存在があることを主張した代表的な著書『相互扶助論』において外に考えられまい。

クロボトキンの『相互扶助論』^(註6)は、雑誌「十九世紀」に一九〇〇年以降継続的に発表された諸論文をまとめ、一九〇二年に刊行されたものである。クロボトキンは『相互扶助論』において、ダーウィンが唱えた進化の一要因としての「生存競争」の概念が、ダーウィン自身その理解の

仕方を広義の譬喩的な意味で使用されるよう注意を喚起していたにもかかわらず、後続の進化論学者によって、単なる生存手段のための各個体間の闘争という狭義の意味に固定され、その結果動物界を血に飢えている者どうしの永久闘争の世界と断定し、人間も従わなければならない生物学的原則にまで仕立てあげたと批判している。その代表者ハックスレーは、「最も弱き者、最も愚かなる者は死滅し、最も頑強なる者、最も狡猾なる者、よし他の点に於ては最善の者でなくとも、兎も角も其の周囲の事情と対抗するに最もよく適する者は、生き残つて来た。人生は不断の自由闘争であつた。そして家族といふ狭い一時的の關係以外では、ホッブス流の総人対各人の戦争が生存の常態であつた。」(『動物の相互扶助』)と断じたのである。これに対してクロボトキンは、「相互扶助は相互闘争と等しく自然の一法則であるが、進化の要素としては恐らくはより大なる価値を有し、種の存続と発展とを保障すべき習慣と特質との発達を促し、同時に又其の各個体に最小の努力を以て最大の幸福と享樂とを得しめるものである。」(同上)と述べ、動物の世界における相互扶助の検討から始め、未開の人間から中世・近代にいたる人間社会の歴史において相互扶助という自発的な協同と連帯があることを実証しようとしている。

前記「種の為、女」は、「世の中」の人間相互の軌轢が決定的な対立にまで激化することなく自然に協調的有和に調整される理由を、「人間生存の意義」が「種の為」、つまり「人類全体」と協同する結びつきによって尽くされるありように求めようとしている。「クロボトキンの論旨」を人間相互の宥和が可能であると整理する考え方は、クロボトキンの『相互扶助論』をどのように理解することによって得られたのか。藤村は、名家という血族意識を共有することによって強固に束ねられた島

崎家一族の中で、自尊を確保しつつ自立を前提とした合理的な扶助の在り方を模索しなければならなかった。その時、クロボトキンが相互扶助の本能を人間の倫理的観念を根拠づける基礎としている考え方に接して、体面や責務という「家」の意識で強制される扶助の在り方を根本から覆した主張に激しく関心をそそられたのではなからうか。クロボトキンは、『相互扶助論』の序論に「愛や、同情や、犠牲は、吾々の道德感情の進歩的発達に、確かに莫大な役目を為すものである。しかし社会が人類の間によって以て立つ基礎は、愛でもなく又同情でもない。それは人類共同意識、よしそれが僅かに本能の域にとどまつてゐるとしても、兎に角に此の意識上に基づくものである。相互扶助の実行によつて得られる勢力の無意識的承認である。各人の幸福が、総ての人の幸福と密接な関係にある事の無意識的承認である。又、各個人をして他の個人の権利と自己の権利とを等しく尊重せしめる、正義若しくは平衡の精神の無意識的承認である。此の広大な且つ必然的な基礎の上に、更に高尚な幾多の道德感情が発達する。」と述べているし、その結論の箇所でも「相互扶助が吾々の倫理的観念の本当の基礎である事は十分に明白な事だと思ふ。」と強調して止むことがない。藤村は無政府的共產主義の理論的基盤となっている『相互扶助論』を、孤立とエゴに呪縛された近代の個人主義の背理と、扶助に絡んで依存と寄生に陥る旧家の頹廃を倫理的に根本から問い直す契機として受容しようとしていたと考えてよいであろう。

(三)

ところで、小説「壁」は、あらかじめ慎重に瀬踏みを行う藤村の長編小説作法に関連させて、従来から『家』のための「部分画」「スタディ」であると指摘され、『壁』に就ては、『家』のディテールを事前に確

認する「スケッチ」であることを作者自ら認めた自注として理解されている。しかし、先走って言えば、小説「壁」と談話「壁」に就ては、人間が生物界の「弱肉強食」の論理に支配され優勝劣敗を繰り返す存在であることを主張するハックスレーや社会進化論の考えをクロボトキンに倣って否定したものである。藤村が前記「種の為、女」で述べた近代個人主義の避けがたいエゴを相対化する見方について、どのように思索を深めていったかを窺わせる資料として興味を引く。なお、この談話「壁」に就ても訂正文等を発表した経緯がないので、その内容に準拠して考察していくことにする。

あの作を書く前から、よく世間では弱肉強食といふが、考へて見ると、自然は却て弱い者を擁護して強い者を働かすものらしい、と、恚ういふ考へを持つてゐましたので、『壁』の中にも、さういふ私の考を書き現はしてゐるつもりです。吉さんといふ廃人を取り囲んで、多勢の兄弟達が鯢鯢とたち働く、その癖吉さんは格別有難くも何とも思つてゐぬらしい——そこを書いたつもりなんです。

ここには、生物界を支配する赤裸々な生存法則は「弱肉強食」であるとする巷間の強固な通念を取上げ、それを人間に適用した場合、この自明視されている生の原則が人間においても容赦なく発現しているのではなく、逆に緩和されている在り方に目をむけさせようとする積極的な提言が行われている。現実の人間関係において勝利は強者にのみ約束されているとは言えない理由を、人間に内在する「自然」の働きかけによって、優勝劣敗の凄惨さが回避され、弱者を「擁護」する関係の有和が可能になると説明している。このような人間の有和的行動は、人の尊厳を尊重する近代の理念の強制ではなく、「自然」の語句によって人間に内在するものとして示されようとしていることが注意されるのである。こ

の「弱い者」を前にして名状しがたい内部の促しに従おうとする小説「壁」の弟の姿は、「壁」に就て」で「自然」は弱い者を擁護するために却って強いものを働かせると述べていた文脈と関係し、それは進化の原動力に人間に固有の倫理的本能として相互扶助が働いていることを実証しようとしたクロボトキンの熱烈な主張とも繋がっているのである。

因みに、「壁」に就て」によると、「壁」は発表されるやかなりの反響を呼んだらしい。藤村が「標象的だとか新らしい描写法だ」と月旦する技巧上の讃辞を強く否定したのは、島村抱月が小説「壁」を絶賛した「三人の作物」(『国民新聞』明41・10・15)を念頭に置いた表現である。そして、「最近の文学界所感」(『太陽』明42・2)でも同趣旨の象徴主義的技巧の意図を繰り返し否定した発言は、小説「家」に先行する「スケッチ」を抱月が読み誤った為に生じた過褒を正す釈明であると理解するだけでは事の真相を明らかにしたとは言えない。藤村の真意には、「相互扶助論」に示唆されて弱者への扶助に向かわせる人間固有の「自然」の発現を問おうとする独自のモチーフがあったことが関係していたのである。

前掲「壁」に就て」によると、三兄島崎友弥をモデルとして「弱肉強食」の通念を問直す考えは、「壁」よりかなり前から藤村の脳裏に去来していたらしい。それは「壁」に先立つ小説「春」の中で同じモデルを幸平の敗残の姿として書いていたことと関連してくる。「春」は「恋の重荷」(初出百二十四回)に苦しむ主人公岸本から、後半「負ひきれない程の生活の重荷」(百十二章)に喘ぐ「家」の問題に内容が変化し、多額の負債を残して兄が収監された後、岸本が唯一の生計維持者として双肩に一家の窮状を担わなければならない。「春」には「幸平兄はその暗い壁に近く寝転んで居る。(中略)『オ、捨さん、お帰るか。』

と幸平はすこし身を起して言つて、復た仰向に寝転んで了つた。斯の失意な、不平な兄は、最早働かうといふ気がなかった。ただく弟の食はせて呉れるに任せて、一生を運命の弄ぶまゝにして居る。」(百十章)と書かれている。この「暗い壁」の側に横たわり、弟に扶養される自暴自棄の厄介者に甘んじている兄の姿が、後の小説「壁」・「家」に発展して行くのである。

そして、百二十三章には「母親、姉、幸平兄、愛子、それから鍛冶橋に居る兄、一時代りともお杉さん——これらの人々を養ふといふことは、未熟な岸本の身に取つて、決して容易ではなかった。」というような打開の困難な状況下に岸本を置くことを通して、藤村は家長への絶対服従から強制される奉公や際限のない無責任なもたれあいでもない、同族が相互に自立を目指す対等の人間関係であることを前提にした合理的な扶助のありかたを模索していたのである。例えば、百二十七章で出口の見えない「家」の呪縛を断ち切る決断を「親はもとより大切である。しかし自分の道を見出すといふことは猶大切だ。人は各自自分の道を見出すべきだ。」と打ち出し、岸本は教師として仙台に赴任していく。老母への孝養に顧慮を払いつつも自己の自尊に執着する強い意思は、「出稼——それは彼の望むところであつた。旅も出来る、多少家への仕送りも出来る」という解決策として主張されようとしている。この自尊の主張と扶助の確保をぎりぎりの所で両立させる選択が、岸本の仙台行きであったのである。それが、小説内の家族の惨状に照らしても妥当な決断であり、しかも扶助を相互に共有する人間関係の発端であることを印象づける為に、百二十八章には「思がけない応援の手紙が北清に居る二番目の兄の許から届いた。留守宅の生活費は月々其方からも助けられることに成つた。今は岸本も仙台の方へ落ちて行くことが出来る。」と書かれて

いるのである。『春』の結末は、明治二十九年の仙台への旅に廻行しながら、実録的に事実をなぞるのではなく、過去の行為に自己確立と扶助を両立させるという新たな意味付与を行おうとした創作であったのである。

『春』第九十二章に透谷の明治二十年八月十八日付石坂ミナ宛書簡の草稿が引用されていることに言及したが、それは透谷の思想の経路を復元する紹介に止まっており、透谷の社会進化論への批判的な対峙の仕方に藤村がどの様に踏み込んで考えようとしているかは定かではない。また、『相互扶助論』と接触することを契機に、弱者に対する人間の関与を内部にある「自然」の促しとして捉える人間把握は、岸本を通して充分に認める事が出来ない。言わば、青春の彷徨の果てに「家」から脱出することによって自己確立を可能にした『春』は、血縁で強く結び付けられた「家」の人間関係の直中における扶助の在り方、そこに浸透する「弱肉強食」の社会進化的な時代風潮を問い直す小説「壁」・「家」とは明らかに位相の差を示していると言えるのである。

(四)

『春』では獄中の家長を待つて侘住まいを続ける留守宅の家族の一人として登場するにすぎなかった幸平が、「壁」では同族から疎まれる廃疾者として『春』とは比較にならない濃密な表現で対象化されてくる。忌避と排除の対象となった被扶養者を前にして、主たる扶養能力のある人間がどの様に考え奔走しているかを描いたのが小説「壁」である。

冷い壁に対つて静かに病軀を横へ乍ら、食せて呉れば食ふし、食はせて呉なければ其迄と言つたやうなのが吉さんの生涯である。四十歳の今日まで、吉さんは世間のことに眼を瞑つて、暗い壁の影に住

むものゝやうに生きて来た。吉さんのことを考へると、必と弟の眼前には一緒に成つてその壁が出て来る。壁は吉さんの一生だとも思へる。

『春』では弱者幸平に関して第百十章に「暗い壁」として一回しか使用されなかった「壁」の語句が、引用部にある通り四回も執拗に繰り返されている。それは、家の隅の暗く冷たい壁際を自分の居場所にして吉さんが、家の構成員の中心から疎外されて周縁に追いやられている残酷な境遇を暗喩するためである。同時に吉さんを疎んじている家人の冷淡な意識をも含意されていることになる。因みに、同じモデルについて『家』では『春』と同様「壁」という語句の使用例は一回であり、「冷い壁の下の方へ寄せて、隅のところに小窓が切つてある。その小窓の側が宗蔵の病軀を横へる場所である。」(上の三)と描かれている。しかし、これは、後述するように小説「壁」のモチーフの追究が後退したわけでは決してない。

吉さんへのコミットの仕方は、借金しても兄弟を助けようとするのは間違ひであると傍観している義父の考えを前にして、弟と兄が交わす会話で各人各説に示される。『壁』に就て「取り上げた『弱肉強食』の論理を振りかざして『人間だから彼様で生きて居られるんだけれどこれが若し野獣で御覧、彼様な奴は最早疾に食はれて了つてゐるんだ。』と語気荒く決めつける兄は、吉さんへのコミットを同族間で優越する男性の体面意識から続けているに過ぎない。一方、弟は、義父の弱者切捨ての論理にも体面を重んじる兄の責務意識にも与していないが、それだけ三人中で最も旗幟の不鮮明な人間として映る。しかし、作者は、長期間の扶養に愚痴をこぼす凡庸な弟にいつ終わるとも知れない塵勞の重さを見つめているだけではあるまい。『吉さんといふ人が生きて居る以上は

どうしても養つてやらずには居られないやうな気がし」て、終日金の工面に奔走する弟の説明しがたい内部の促しに注目している所に、藤村の独自の思念が窺えるのである。つまり、弟の行為は他者に能動的に働き掛けるヒューマニズムの積極性では全くないし、自己分析可能な惻隱の情でもなく、弟の内部に存在する「自然」の発現として書かれているのである。「壁」に就てで、金の工面に奔走する兄弟の苦勞を余所に、吉さんの非当事的な無感覚振りを強調しようとした意図の確認は、逆に弟に扶助への関与を促す内部の声の存在を強く印象づける書き方であったことを示唆している。扶助に係わる兄弟について、一方を「弱肉強食」の論理の体現者とし、他方を人間内部の「自然」の促しに応えようとする対照的な描き方は、クロボトキンが人間の進化の理由について自然淘汰以上に人間に固有の倫理的本能としての相互扶助を熱烈に主張しようとした考えが反映しているのである。

廃疾者と扶養者との相互関係について拘泥し続ける表現は、小説『家』においてより一層多面的な人間関係の場に据えられて追究されることになる。「家」の上・下巻を通じて旧家の窮迫をめぐる人間関係で印象的なのは、敗残の身を縁者に頼るしか術のない宗蔵が、直接的な登場場面は少ないにもかかわらず、血縁で結びついた扶養の問題の重苦しさには必ず絡んでいることである。宗蔵のモデル島崎友弥（明治44年没）は、西丸四方が『島崎藤村の秘密』で出生の秘密を公表してから、作者の自伝的小説において書かれることの少ない忌避された人物と考えられがちである。しかし、藤村の個人的な嫌悪の感情のために友弥が作品から排除されたとは一概に言えない。むしろ、『春』から「壁」を経て『家』にいたる三兄友弥の形象は、彼が同族から歓迎されない廃疾者であることによって、家族道徳のありようを家系に結ばれた人間関係の場において

焦点化する機能を徐々に高めていっている。言わば、藤村は友弥を通じて「家」に繋がれた構成員の意識の暗部を直視していたと言っても過言ではないのである。

上巻四章で、小泉家の家長実が新婚家庭の三吉に宗蔵を同道させようとするのは、宗蔵が家長権の庇護の対象から除外される厄介者の運命にあることを示している。実の家族は言うまでもなく、姉のお種までが「彼は小泉の家に附いた厄介者です。」（上の九）と眉を顰めるように、同族の心理は一同挙って忌避して憚らない。その中で、次兄の森彦が終始宗蔵の扶助に尽力してきた理由は、心情的には持て余し者を激しく侮蔑しながら、旧家の男性の矜持と義侠心を持ち前とする行動原理が忌避の感情を上回る程優越していたからにはかならない。森彦の助力は、自恃意識の裏返しに過ぎない。実際の行動家を自負する森彦は、時として弱者に対して歯に衣を着せない辛辣な酷薄さを示す。「家」のヒエラルキーに従順でない宗蔵に対して唾棄の感情がストレートに表明された時、上巻九章でお倉が森彦の言葉として「宗蔵のやうな奴は……獣でもあらうものなら、踏殺して呉れないなんて……」と伝えるやうな激語になっても不思議ではないのである。この上巻九章の森彦の激語と、宗蔵を罵倒した下巻五章の森彦の次のやうな言は呼応している。「真実に、宗蔵の奴は困り者だよ。人間だから彼様として生きて居られるんだ。これもし獣で御覧、彼様な奴は疾に食はれて了つてるんだ。」これは、前出の小説「壁」談話「壁」に就てに見出される表現と殆ど同じ趣旨と言える。これら一連の「弱肉強食」をめぐる表現が森彦を通して打ち出されている狙いは何か。『相互扶助論』の文脈で考えていくと、ダーウィンの『種の起源』の「自然淘汰」というキーワードを適者生存の競争原理に狭義に解釈したハックスレーの考え以降、この生物学上の進化

論を社会・経済・歴史の万般に優勝劣敗の原理として適用しようとした社会ダーウィニズムの風潮に照応している。言わば、適者生存の原理が支配する明治社会において、衰微する一方の旧家に抗い続ける硬派の森彦は、明治十年代以降社会に浸潤する社会ダーウィニズムの時代風潮を率直に代弁していたのである。

一緒に扶助に協力して来た三吉のスタンスの取り方は森彦と同一ではない。森彦の関与の仕方が剛毅な直情性によって単純明快なのに比べて、三吉の係わり方は曖昧な晦渋を残している。それは、自意識という自己の論理内に完結している森彦と同族の意識変革に期待を繋ぐとする三吉との違いでもある。例えば、三吉は下巻第五章で「彼がアクセクして居ることは、唯身内の者の為に苦勞して居るに過ぎないかとも思はせた。」と懷疑している。この徒勞感の原因は、同族への自立の期待が次々と覆えられていったことにある。実の長女お俊を学校に入れたのは「独立の出来る道を立てゝやつて、母親さんを養はせる積りだった」(下の五)が、お俊は教師などには向かない娘に育ってしまい、母親のお倉も「弱い」で、可傷られるうちに、今では最早真実に弱い人(同上)になつてしまった。同族がみな自尊を放棄して際限のない寄生的な依存に甘える人間になつてしまったことについて、「吾儕は長い間掛つて、兄弟に倚凭ることを教へたやうなものぢやありませんか……名倉の阿爺なぞに言はせると、吾儕が兄弟を助けるのは間違つてゐる。借金しても人を助けるなんて、其様な法は無いといふんです。」(同上)と批判する。扶助を継続する名分を否定した三吉の言は、同族の扶助関係を互いに自立を前提とした道理のあるものにしたと願つて来たことが、全く不本意なもたれあいに泥沼化したことの失望感が言わしめたのである。このようにして『家』の登場人物で森彦と異なつた原理を探りながら依存と

寄生という扶助に纏わる頹廢の問題に批判的に対峙した人間は三吉一人となる。

しかし、作者は旧家の人間が陥っている頹廢について唯一の批判者である三吉のラジカリズムを「何のかん」と言つて見たところで、弱い人達が生きて居る以上は、どうしてもそれを助けられない訳にいかかつた。」(下の五)と決定的な対立にまで貫徹しようとせず反転させる。これは、一見同族意識に呪縛された個人主義の脆弱さとも評しえよう。しかし、同様の事例は、これまで扶養を続けて来た強者森彦にも示されているのである。三吉は、故郷の山林事件に八年奔走し、地方に尽くそうとして「人を助けて、自分で困つてゐる」(下の八)森彦の皮肉な窮状が、旧家の尊大な義侠心に災いされた必然であることを見届けている。この時、親戚に迷惑を懸けるのは「素志に背く」(同上)と言いつつ金の融通を強要しようとする森彦は、下巻第六章で三吉に連帯保証人を頼もうとした正太等他の同族の遣り方と異ならない。この時、行動の原理を異にしたがらも無原則なもたれあいを指弾してきた森彦の変節を批判する三吉の談判は、森彦にシャッポを脱がせる過激さを示している。しかし、作者は森彦の失意と窮迫の姿を前にした時、三吉のラジカルな批判意識をトーンダウンさせ「修行ざかりの娘を二人まで控へた森彦の苦んで居る姿が、三吉の眼にチラついた。彼は兄を助けずに居られないやうな気がした。」(下の八)という内部に底流している明示しがたい衝迫に直面させていく。

宗藏に対する心情の相違はともかくとして、森彦と三吉は一族の中で宗藏に最も積極的に関与した人物である。しかし、大事なことは、社会ダーウィニズム的な「弱肉強食」の論理を代弁する森彦に対して、三吉が内部に流れる「自然」の衝迫を確認しようとしていることである。作

者は「弱肉強食」を人間界の原則と見做している一般の考えを転倒させた小説「壁」のモチーフを、森彦の行動原理とは違った意識で扶助する三吉を通して追究しようとしているのである。三吉の内部の促しが森彦にまで示されることによって、世上一般に強固に根を張っている勝者と敗者を弁別する論理を超えることを主張しなかったのである。ここに、クロボトキンの『相互扶助論』に示唆された藤村の考え方の根本的な投影がある。

(五)

すでに『家』奥書(『定本版藤村文庫』第五篇 昭12・10)で周知になっているが、『新しい家』の形成過程を追究しようとした意図は、個人の自尊を阻む機構としての家族制度の実態を鋭く批判する。同時に、出自に結びつけられた血族に固執する共同体は、相互の批判意識を弱め、名門意識にはびこる集团的甘えを温存させ、無原則な経済的依存と寄生的な精神の頹廢を招く実態を剔抉している。この主軸となる批判は、『新しい粗末な家を作らうと思ひ立』(上の三) ち運命共同体から離脱しようとした小泉三吉の近代個人主義の確立の経路として構想されようとした。ここには、一見「家」の問題を巡る新旧の相剋が前者の後者への優越を時代的必然とする論理で支えられているようである。だが、徐々に扶助の渦中に引き込まれる三吉の描き方は、世上流布している「弱肉強食」の論理の根拠となる「我利」や、個々に分断された孤立等を自明とする近代個人主義の負の側面を、扶助への関与の仕方を人間の内部にある働き掛けから問い直そうとしている。つまり、クロボトキンの『相互扶助論』に感化をうけた小説「家」には、自尊の名分のもとにエゴを奉じて主張される切捨ての論理にも与せず、扶助を「家」の体面意識に

よって強制されるありかたでもなく、人間に固有の倫理的な本能であるとして描くことによって、高次の道德的關係のありようを模索する根源的な問いかけが秘められていたのである。

注

- 1 福田清人「三代文士收入史(明治・大正・昭和篇)」——経済面からする文学研究——(『文学界』昭28・6・8) 瀬沼茂樹『島崎藤村』(昭32・5 角川文庫) 池田義孝『島崎藤村の生涯』(昭36・6 角川書店)
- 2 『世界の名著42 ブルドン バクーニン クロボトキン』(昭42・11 中央公論社) 15、21ページ参照。なお、この出典の件については、平成八年三月本学大学院国語教育専攻を修了した荒木雅人君の教示による。
- 3 このハガキは全集には所収されていないので全文を紹介する。「毎々御尋ね被下候処いつも不在にて甚だ失礼仕候事情ありて稿を急ぎ當時は他へ参り筆執り居候仕末何卒年内寄稿の事は御許たまはり度猶来日曜には用事ありて旧友の許へ参る約あり次の日曜には必ず在宅仕候間御都合宜敷候はゞ御来訪被下度候右御返事迄草々十月十四日島崎生。なお、「種の為、女」と「記者日記」の筆記者は、いずれも「N生」と署名されている。おそらく明治四十年「早稲田文学」の記者になった中村星湖であろう。
- 4 北小路健『図説「夜明け前」の栞』(昭48・8 国書刊行会)
- 5 槇林滉二は『進化論』の狭間にて——透谷と自律——(『佐賀大学教育学部論文集』第35集第1号 昭62・7)において、透谷にスペンサーの進化論的優勝劣敗の論に対して反指した一つの流れがある

ことを論じている。前記ミナ宛書簡草稿以外で、楨林が挙げている透谷の関係資料「内部生命論」(「文学界」明26・5)等を藤村は承知していた筈であるが、透谷が行った「反措定」を『春』でどう処理しようとしていたかは不分明な点が残る。

6 『相互扶助論』のテキストは、大杉栄訳『相互扶助論』(『クロポトキン全集』第七巻所収 昭3・7 春陽堂)を使用した。

7 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』(昭56・10 筑摩書房) 和田謹吾『家』の構図をめぐって(「現代作家・作品論」昭49・10 河出書房新社)等。

8 島村抱月は「三人の作物」(「国民新聞」明41・11・15)において「いふまでもなく標象的のもので、作者が覗つた点は、おぼろげながら会得することが出来る。描写法に於ても出来るだけ、膩や艶を抜いて了つて、肝心な急所ばかりを現はしてゐる。従て深だ。」と高く評価している。

9 西丸四方『島崎藤村の秘密』(昭41・7 有信堂)